

東経 20 度ベルト地帯

—明治大学図書館外国地域コレクション自主研修グループ報告—

坂口 雅樹*

生田のすさみ

生田図書館の紹介記事を書ける段になると、いつものことながら、はたと考えることがある。特色あるコレクションを色とりどりに紹介している中央、一品極上でとくとくと語ることができる和泉、これらの執筆原稿に目をやると、このときばかりはため息である。生田図書館では重要文化財修理工事報告書のシリーズや、人によっては Gmelin-Beilstein のハンドブックを紹介することもあるが、中央図書館の自動書庫にみられるような、文庫と名のつくコレクションは生田図書館にはない。

そこである日、生田図書館紹介記事の原稿を依頼されて、ちょっと心に留めておいた生田保存書庫のコレクションを一行入してみた。数日後、ある方から電話が入った。内容はどうかあれ、資料にかってに名前をつけるな、というお叱りの言葉であった。

名前を持たないコレクション。それはその他一般の、まるで私という人間のようである。しかしながら、ほかのものとは何かが違う。実際、中央図書館からリクエストがかかる資料。そういうものを日々の労働の中で見過ごさないで、機会さえあれば伝えていきたい。それが図書に接する人の

* さかぐち・まさき／図書館事務部生田図書課

原点ではなかろうか。図書館で誰かがお墨付きを与えて名前を冠したものを右から左へ流していく退屈さ。思い浮かべるのは、公認というレッテルである。そういうものかな、この世界は。地下生活しか知らない者には、地上の人のお許しが待ち遠しかった。しかしながら、ご沙汰はなかった。忘却といえようか。生田保存書庫のたわごとなど。

生田保存書庫資料は中央図書館からの移転資料であるがゆえに中央図書館の資料である。しかし、移転してしまったからには中央からは、もはや姿のみえない資料である。とくに KZ という記号を付与された寄贈図書は、中央図書館書庫の狭隘さゆえに、整理から配架にいたるまで、一度たりとも中央図書館書庫に並んだことはない。もしも生田の誰もが顧みないのならば、それはブラックボックスという器の中で息を潜めるしかない。保存書庫書架のブラウジング（逍遙）は生田の仕事であり、司書と呼ばれる人の使命は、この資料の存在価値を世に知らしめることではなかろうか。

誰も知らない

イタリア関係のイタリア語図書が、一般図書と峻別された請求記号を与えられながら、保存書庫に眠っている。ときおり、他大学からリクエストのあるこの資料群の主題は、ファシズム研究を軸にしたイタリア近現代史関係資料である。これを寄贈した人は、和泉校舎の元教授である。本文言語イタリア語の近現代史関係図書は、中央図書館書庫にもあると思われるが、調査したい衝動に駆られたのは、請求記号に KZ2 を付したこの資料群である。

地下生活の図書館員の名前など、いずれ跡形もなく消え去る。しかし、図書館員の宿命ともいうべき伝承精神というものは形として残る。その形とは、眠れる資料群を発掘し、存在を世に知らしめる行為である。ファシズムの研究者であった桐生尚武・元政治経済学部教授の遺してくれたものが、KZ2 という形で生田保存書庫の一角を彩っていることを記したい。

* 資料番号 1 イタリア近現代史関係資料（桐生尚武教授寄贈図書）

総冊数（資料 ID 数） 2,808 冊

本文言語種別 イタリア語

2,786 冊

本文言語イタリア語だけで99パーセントというのは、この2,808冊の資料群を指す。これをしてイタリア文庫と名づけて、はたしておかしいであろうか。請求記号第4区分がKZ2とは、こういう特徴を持ったコレクションである。しかも、日本十進分類法（NDC）でイタリア史に342冊、イタリア政治史に702冊分類されており、実に半数近くがイタリアの地域研究史に関係している。地下人が見たコレクションと念じて悪くはない。中央図書館、和泉図書館にもイタリア語のイタリア史、イタリア政治史資料が眠っているかもしれない。そういう資料を仲間として呼び寄せるのも、地下の精霊の務めだと思うのである。



【KZ2 イタリア近現代史関係資料 生田保存書庫】

ここで、桐生尚武教授寄贈図書整理閑話：

「おもにスペルチェックです。特別なことはありませんでした。ただ、従来あまり扱ったことのない言語ということで責任表示をどこまで記述するかが問題になった覚えがあります。例えば"a cura di～"は"ed. per～"と同じものと見なす、など。それと、コレクションの性格上ファシスト関係の図書が多く、出版年がファシスト暦のものもありました。それを西暦換算する手間がありました。あとは『版表示なのか刷なのか』があいまいなことがけっこうありました。例えばフランス語だと"édition"・"réimpression"ちゃんと用語を使い分けているのにイタリア語の"edizione"はちょっと怪しいの

です。これについては『これだからイタリア人はいいかげんだなー』と笑い話にしておりました。」

散逸の方程式

ヤドランスコ・モーレ（アドリア海）の彼方に、ダルマチアの島々を玄関口にして、キリスト教とモスレムの文化織り成すバルカン半島がある。バルカン文庫といえようか、この地に生きる人々の文化が、図書という形で和泉図書館の書庫に眠っている。この資料群、実は桐生元教授寄贈図書とは様相が異なる。それは、一般図書の中に埋もれているという点であり、時間を追うごとに散逸の方程式に陥る危険性をはらんでいる。まるで毛利家旧蔵書のごとく。そういえば、3地区に分散して一般書庫に配架されていたコレクションが重複除籍の災いから逃れるために最近、保存庫に移転された。フランス文学コレクション・佐藤正彰・元文学部教授旧蔵書約4,000冊である。

ブルガリア語を中心として、バルカン半島からアナトリア（トルコ）にいたる地域資料を寄贈していただいたのは、和泉校舎の佐原哲也・政治経済学部助教授である。総数1,031冊、内143冊はトルコ文庫に吸収されて中央図書館自動書庫に配置されている。そして残りの888冊が和泉図書館書庫に眠っている。この請求記号でグループ化できない、何の特徴も図書ラベルからは判断できないものを、寄贈者の名前を格納したデータから抽出するほかに復活の手立てはない。自主研修グループが早速立ち上がった。図書館システム担当者をお願いして、佐原助教授寄贈図書をリストアップした。リストには、資料ID、タイトル、請求記号が出力されていて、さらに手分けしてOPACを検索して必要な情報である図書の本文言語を一点ずつ調べ上げた。後で気がついたのだが、本文言語も一緒に出力できれば何の苦労もなかった。しかし苦労は人を裏切らないどころか、思わぬ発見をもたらす。この寄贈図書群が実に多様な言語群から構成されていることが、キーをたたく音に似て、感動の源泉となった。それは、オスマントルコの存在を意識したからである。中央図書館のトルコ文庫に連なるバルカン関係資料。バルカンの歴史を語るとき、この地を支配したトルコの存在を、

図書は随所に物語っている。トルコ文庫ではなく、アナトリア・バルカン文庫またはトルコ・バルカン文庫。中央のトルコと和泉のバルカンを結ぶラインを再構築する。そういう衝動に駆られた。

***資料番号2 バルカン関係資料（佐原哲也助教授寄贈図書）**

総冊数（資料ID数） 1,031 冊

本文言語種別

①ボスニア語	26 冊
②ブルガリア語	339 冊
③教会スラブ語	1 冊
④英語	4 冊
⑤フランス語	5 冊
⑥ギリシア語	100 冊
⑦マケドニア語	1 冊
⑧ルーマニア語	3 冊
⑨ロシア語	30 冊
⑩セルビア語	182 冊
⑪クロアチア語	137 冊
⑫スロベニア語	2 冊
⑬トルコ語	129 冊
⑭多言語等	72 冊

所蔵館別

トルコ語など→中央図書館自動書庫「トルコ文庫」に 143 冊

トルコ文庫を除くすべて→和泉図書館書庫に 888 冊

この結果を佐原助教授にメール添付で、唐突にも送信した。これだけのものをどのようにして収集したのかを知りたかった。まもなく返信があった。感謝の言葉につづき、氏の留学時代やその他の機会に買い集めたものの中で、当座の研究で必要ないものを寄贈したとのことであった。いずれゆっくりとお話を伺えるとのことである。

小川の向こうに大河が

さてトルコへの旅である。中央図書館自動書庫といえば、文庫の宝庫。その一つを飾る文庫の目録が刊行された。いまや明大図書館トルコ文庫は世に知れ渡っている。目録を開くと、「目録の刊行に寄せて」のなかで、文庫寄贈者である永田雄三・文学部教授の名前とともに、佐原助教授の名前も挙がっていた。ということは、トルコ文庫の図書 2,527 冊のなかの 143 冊は、佐原助教授の寄贈図書であるということになる。文庫目録の凡例には載らなかった数字をここで記すことにする。なお 2003 年 2 月時点では 2,031 冊を所蔵していたが、その後、文庫の充実を図り、2006 年 2 月現在で 2,527 冊になって増加し続けている。ここで挙げるのは 2003 年 2 月の原初的数字である。

* 資料番号 3 トルコ文庫（永田雄三教授、佐原哲也助教授寄贈図書）

総冊数（資料 ID 数） 2,031 冊

本文言語種別

- | | |
|---------------------|---------|
| ①現代トルコ語（アルファベット表記） | 1,741 冊 |
| ②オスマントルコ語（アラビア文字表記） | 120 冊 |
| ③その他の言語（英独仏など） | 170 冊 |

トルコ文庫整理にまつわる簡単な聞き取りを行った。そのメモを載せる。

- 「1. トルコ文庫は無償寄贈
2. 整理は外部委託
3. 整理期間は 1 年未満『10 ヶ月くらい』
4. 寄贈されたものはすべて、言語を問わず請求記号第 4 区分 TU として整理
5. 外部委託整理後に受け入れた、一般図書『研究用図書費』で購入したものでトルコ文庫の範疇に入るものは、研究者の要請または系の判断で、一般分類ではなくてトルコ文庫として整理
6. トルコ文庫を充実させるための図書館特別資料購入予算はない。」

看板文庫

さてトルコ文庫を終えて南下しよう。そこはアフリカ大陸、つまりアフリカ文庫の世界である。2006年11月25日現在、6,508冊となって書庫に配架されている。この文庫についてはいまさら言うべきことはない。しかし気になることが一つある。それは、トルコ文庫と決定的に違うのは、アフリカ文庫には図書館特別資料購入予算がついていることである。トルコ文庫は小川の流れのごとく、それとは対照的に、アフリカ文庫は威風堂々と大河の流れのように存在感を増している。この強大な大陸を背景に、請求記号Aは中央図書館自動書庫で日々増加している。本文言語と主題分類でその特徴を垣間見た。

*資料番号4 アフリカ文庫

総冊数（資料ID数） 6,508冊

本文言語種別

①英語	4,506冊
②フランス語	1,490冊
③ドイツ語	108冊
④スペイン語	38冊
⑤スワヒリ語	27冊
⑥ポルトガル語	17冊
⑦日本語	13冊
⑧多言語等およびその他の言語	309冊

その他の言語には、アフリカ固有の言語がごくわずかながら見られる。例えば、アムハラ語、アラム語、ベルベル語、イボ語、キクユ語、ショナ語、ソマリ語、ホサ語などであり、オランダ語から転訛したアフリカーンス語もある。

主題分類でもっとも多いのがアフリカ史であり、地理、文化諸事情、政治史を加えると1,921冊である。アフリカ文学も376冊を数え、経済史、国際関係、民族問題など主題は多岐にわたる。

由緒ある文庫

アフリカ大陸南端、南アフリカ喜望峰付近は東経 20 度ラインに位置する。ここで反転、一気に北上して中部ヨーロッパに戻る。カール・ボーズル文庫は、アフリカ文庫の隣に位置する。資料 ID をもたない抜き刷りを除くと、登録冊数 13,919 冊。ドイツを中心とした中部ヨーロッパの研究には欠くことのできない資料である。

*資料番号 5 カール・ボーズル文庫

総冊数（抜き刷りを除く資料 ID 数） 13,919 冊

本文言語種別

①ドイツ語	11,084 冊
②英語	625 冊
③フランス語	190 冊
④イタリア語	176 冊
⑤ラテン語	135 冊
⑥チェコ語	40 冊
⑦日本語	39 冊
⑧多言語等およびその他の言語	1,285 冊
⑨不明	345 冊

文庫の特徴は、なんと言ってもヨーロッパ史にある。ドイツ史 3,390 冊を含めると総数 4,724 冊がこれに該当する。これはあくまでも登録された図書であり、抜き刷りを加えるとその数は尋常ではない。この膨大な資料でも特に目につくのは、ヨーロッパ地理 592 冊、キリスト教 1,280 冊、逐次刊行物 652 冊、政治史 294 冊、伝記 272 冊、ドイツ文学 615 冊。NDC の人文・社会科学全域にわたる主題を擁するこの文庫は、連日利用者が絶えない。しかし、ここにいたるまでの図書館の苦労は計り知れないものであった。ここに当手を振り返り、整理作業に汗を流した人の声を聴いて欲しい。

「ミュンヘン大学名誉教授カール・ボーズル博士 (Karl Bosl, 1908-93) の旧蔵書は三宅立・文学部教授を始めとする 4 学部 10 名の教員の申請により 1995 年度特別資料購入費で極東書店から購入された。高額なコレクションであったため、研究用図書費、学習用図書費の一部を充て、2 年かけて購

入された。

図書、逐次刊行物の登録冊数は 13,000 冊を超えた。整理は 1995 年度から始まったが、資料数が余りにも多かったので、整理が終了するまで 4 年を要した。データは NACSIS-CAT にも登録してある。そのため外部から整理されたばかりの図書の利用申込みがたびたびあり、参考係から整理課へ問い合わせがよくあった。

当時はまだ現在のような整理業務のアウトソーシングが行われておらず、通常の新刊書の整理業務も平行して行わなければならなかった。そのため新刊書の迅速提供ができず、結果的に利用者に迷惑をかけてしまった。

また図書、逐次刊行物とは別に抜刷のコレクションもかなり膨大にあった。抜刷約 5,000 件についても整理することになったが、図書、逐次刊行物と同様な整理を行わず、データ入力専任の嘱託職員を 1 名雇い、「Lotus 1-2-3」を使ってデータ入力を行った。抜刷のコレクションの中からも図書で整理を行ったものもあった。

最終的には、図書 9,456 冊、逐次刊行物数 4,367 冊となった。図書、逐次刊行物は『ボーズル文庫分類』（三宅教授らが作成）が別途作成されたので、これに従い請求記号を付与した。

ボーズル文庫分類

KB0 『ボーズル文庫』関連資料

KB1 ボーズルの著作・記念論文集

KB2 記念論文集（ボーズル以外）

KB3 一般、その他（以下の KB4、KB5、KB6 に分類できないもの）

KB4 原始・古代から中・近世まで（中世中心）

KB5 近・現代史（18 世紀以降）

KB6 ボヘミア、東欧史

KB7 叢書

KB8 その他

また、抜刷についてはボーズル関連抜刷 775 件、その他の抜刷 7,325 件、合計 8,100 件となった。

『ボーズル文庫』の整理が終了し、1999 年 3 月に『明治大学図書館所蔵カール・ボーズル文庫目録』図書編（A4、977 ページ）、抜刷編（A4、517 ページ）

の2冊にまとめられた。」

ヨーロッパの裏庭といわれて

ボーズル文庫に隣接して、東経20度線の旅は、東ヨーロッパへとつづく。そこにも生田保存書庫の世界があった。

KZ4 阪東宏・名誉教授（元文学部教授）寄贈図書。それはポーランド史を中心とした、東欧関係の個人文庫としては他に類をみない貴重なコレクションである。2,443冊は2006年11月の所蔵入力冊数であり、現在残りのおよそ100冊余りが加わると、約2,600冊になる。本文言語別内訳では1,744冊がポーランド語であり、ポーランド語を含む多言語56冊を加えると1,800冊、総冊数の実に7割を占めることになる。東欧文庫と名づけてもおかしくない。主題分類では、東欧史693冊を含むヨーロッパ史が754冊であり、実質ポーランド史が中心である。特徴は個人伝記が229冊でこれにつづき、政治史、政党、政治結社、外交・国際関係史、社会思想など、大半が社会科学の分野である。

*資料番号6 東欧関係資料（阪東宏教授寄贈図書）

総冊数（資料ID数） 2,443冊（2006年11月現在）

本文言語種別

①ポーランド語	1,744冊
②ロシア語	308冊
③英語	214冊
④ドイツ語	71冊
⑤ポーランド語を含む多言語	56冊
⑥ポーランド語以外の多言語及びその他の言語	50冊

忘却とは

KZは大型寄贈コレクションに割り当てられた請求記号の一部である。2006年12月現在でKZ5まで確認できる。KZとして認識できるものはまだいい。一般書庫の大海原のなかには、存在価値を世に知らしめて欲しいと

待ち焦がれている無名の資料群があるに違いない。だからこそ、この旅を終わらせるわけにはいかない。それは、研究者がこつこつと図書費で買い漁って蓄積していく中で図書館員が発見した、些細ではあるが忘れることのできないたった一つの思い出深いコレクションである。東経 20 度線の醸し出す可能性を探って、北上した。

* 資料番号 7 北欧関係資料（尾崎和彦教授選定図書）

総冊数（資料 ID 数） 187 冊（2006 年 11 月現在）

本文言語コード

①スウェーデン語 100 冊

②デンマーク語 62 冊

③ノルウェー語 22 冊

④アイスランド語 3 冊

所蔵館別冊数

中央書庫 97 冊

和泉書庫 90 冊

和泉図書館に半数近くの北欧言語図書がある。思い出すのは、中央図書館が誕生する以前に、図書館本館で尾崎和彦・名誉教授（元政治経済学部教授）の依頼を受けて、北欧から図書の貸出を頻繁に行っていたことである。中央図書館に眠る 97 冊の図書の中には、コピー製本の資料がかなりあるに違いない。図書館員がせっせと自前で全ページ複写して収納したものである。これに対して和泉本は研究用図書費で購入したものを退職時に図書館に返却したものと考えられる。北欧文化をテーマに、哲学、神話、宗教、医療倫理などを研究するための図書が書庫にある。しかしながら、図書の主題分類では必ずしも NDC100（哲学、心理学、倫理学、宗教）ではなく、社会学、民俗学（民族学）と北欧文学が多数を占めている。研究用図書費購入であるために、一般図書扱いであり、このように研究者がいなくなればその図書が置き去りにされるのが普通である。

喜望峰からスカンジナビアへ

明治大学図書館には外国地域研究の蔵書が数多く存在する。これらは、

コレクション名を冠している場合と、請求記号で一括して配架している場合とがある。ところが、これにも属さない、請求記号では判別できない一般図書が、異彩を放ちながら陽の目を見る日を楽しみに待っている。その典型的な例が、和泉図書館で所蔵している旧ユーゴスラビア関係の蔵書である。バルカン文庫と名づけてみたが、他にもこのようなケースがあるのではないかと、そういう疑念から、同志を募ってこの研修グループが産声をあげた。それは公的にいえば、地域研究の特色あるコレクションが現在どのような状況にあるのか、その全体像を明らかにし、新和泉図書館の理念の中核をなす蔵書の個性化論議に一石を投じることを、活動の主たる目的とする。本研修調査活動のキーワードは「喜望峰からスカンジナビアへ」、具体的に言えば、東経 20 度線に沿った地域が、明大図書館の個性的な地域研究資料の範囲に相当する。なお本研修の発想は、新和泉図書館の基本構想(新和泉キャンパス基本構想案・学長方針のための広沢絵里子副館長メモ・2005 年 12 月 14 日)に触発されたものである。

なお、和泉図書館書庫における本文言語外国語種別の 2006 年 11 月の所蔵状況を調べたので、和泉図書館書庫の特徴としてデータを載せることにする。英語 (19,858 冊) 中国語 (8,451 冊) ドイツ語 (7,563 冊) フランス語 (7,076 冊) ロシア語 (1,705 冊) スペイン語 (776 冊) イタリア語 (696 冊) ブルガリア語 (358 冊) セルビア・クロアチア語 (321 冊)。これをみてもバルカン言語 (佐原助教授寄贈図書) が書庫でいかに彩を添えているかわかる。

自主研修グループは整理課・柴尾晋、同・伊藤朋子、及び小職からなる。両名には書誌データの本文言語の集計作業を行ってもらった。しかしながら、資料整理の現場に実際に身を置いた職員の声なしには本稿が実を結ぶことはなかった。末尾ではあるが、柴尾、伊藤両名とともに、過去の追憶をメモにして寄せていただいた総合サービス課・鈴木秀子氏に感謝の言葉を述べたい。また、書誌・所蔵データの抽出作業に、多量の汗をかかせてしまった図書館庶務課・梅田順一氏に、心からお詫びと御礼の言葉を述べたい。